

めざせ!!

メディカルエグゼクティブ

監修：愛知医科大学内科学講座肝胆膵内科学准教授(特任) 角田 圭雄

第14回

人生100年時代のキャリアマネジメント

CASE



市中病院で内科部長を務めるA先生は卒後15年目。病院での待遇やポジションには不満がなく、これまでに多くの症例を診て経験を積み、臨床医として強い自信を持っています。ところが、ある日、書店で『人生100年時代をどう生きるのか』とのタイトルの本を目にし、「この先の人生は、まだまだ長い。果たして自分の持っている知識で、このまま臨床をつづけていけるのだろうか」と不安を抱くようになりました。

もはや「100歳」は珍しくない

日本の100歳以上の人口は、老人福祉法が制定された1963年には153人にすぎませんでしたが、2021年には約86,000人に達しています^[1]。また、ロンドンビジネススクールの教授のリンダ・グラットン氏の研究によると、2007年生まれの日本人の子どもの50%が到達すると期待される年齢は、なんと107歳だそうです^[2]。したがって「人生100年時代」というキーワードは、決して大袈裟ではありません。

これほど長生きするとなれば、人生で働くことになる期間も当然、延びますが、現代のような「VUCA（変動性、不確実性、複雑性、曖昧性）の時代」では、学生時代に学んだことだけで仕事をつづけるのに限界があるのは明らかでしょう。そこで今、かつての「教育

→仕事→退職」の3ステージを一直線に進んでいく人生ではなく、社会人になってから教育機関に戻って“学び直し”をし、そこで得た新たな知見を仕事に活用するといったサイクルを繰り返す「リカレント教育」が注目を浴びています（⇒STUDY①）。

新しい専門分野を学ぶ意味

では、具体的に何を学ぶりカレント教育が考えられるでしょうか。

医師の場合、専門分野の博士号を取得するために大学院に進学したり、専門分野の経験をより重ねるべく海外留学をしたりする方が多くいます。しかし、リカレント教育では専門外の分野に着目することも選択肢のひとつです。これまで培った専門分野での深い知識をさらに生かすために、まったく新しい専門分野の知識を身につけるのです。ぜひ、自身

の価値観を見直し、長期のキャリアプランを模索しながら、「自分の強みは何か」、「社会から何が求められているのか」、「何を学ぶべきなのか」を考えてみてください。

A先生の場合、たとえば内科医としての専門性に加え、新たにICTの専門性も身につければ、医師の観点を生かした使いやすい医療連携システムを構築するなどして、これまで以上に地域医療に貢献できる可能性が広がります。

現代においては、解決のために複数の要素の知識が求められる問題が多くあります。こうした状況下では、ひとつの専門分野だけに秀でた「T型」人材より、複数の専門分野の知見を備えた「π型」人材が必要とされるのです（⇒STUDY②）。

「1/100万」の人材に!?

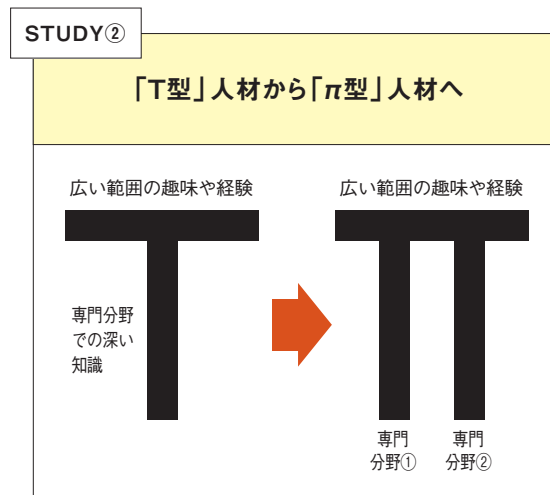
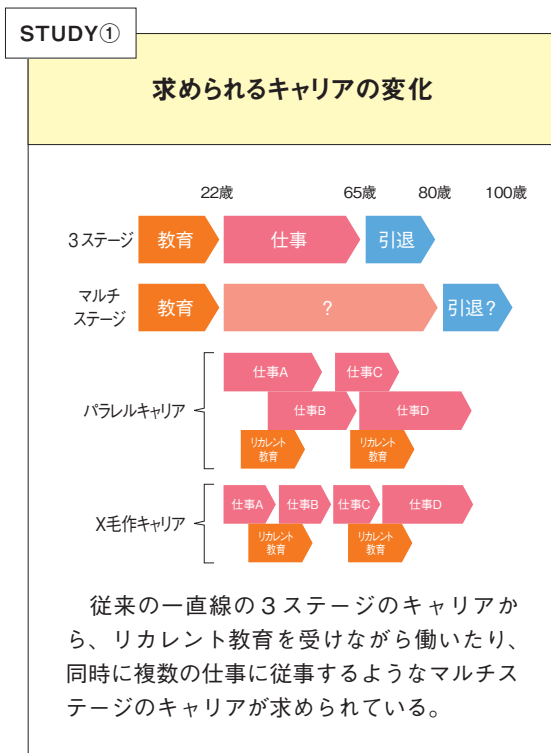
ところで、「1/100万」の存在の人材と聞いたら、どのような感想を持つでしょうか。あまりの比率の低さに「自分に関係ない」と思うかもしれません。では、「1/100」だっ

たらどうでしょう――。

民間企業から公立学校の校長に転じた藤原和博氏が人生100年時代において提唱するのは、「1/100」の存在になれる専門分野を複数、持つことです。そのような分野が3つあれば、 $1/100 \times 1/100 \times 1/100 = 「1/100万」$ の存在になれるというわけです。仮に臨床医で、ICTを知り、加えて医療経営の知識まで身につけたならば、その存在は限りなく希少で、長く社会で活躍できる人材になるのではないのでしょうか。

NEXT STEP

A先生は、まず、医療経営のノウハウを身につけようとMBAの取得をめざし、ビジネススクールに通い始めました。新しい分野の勉強が新鮮で面白いのはもちろん、同級生にはビジネスマンや政治を志す人などさまざまな職業の受講生がおり、A先生は彼らとの交流を通じて、自身の視野が広がったと実感しています。そして、多様な価値観に触れた結果、臨床でも以前より患者の気持ちが理解できるようになったそうです。



- RECOMMENDED BOOK**
- 『MBA的医療経営』
著：角田圭雄／発行：幻冬舎
 - 『戦略的医療マネジメント』
編集：角田圭雄／発行：中外医学社

[1]厚生労働省プレスリリース(2021年9月14日)／[2]第1回人生100年時代構想会議リンダ・グラットン議員提出資料